

# 私学の振興

園部 ピア（76歳）

秋田市

園部氏は、ドイツに生を享けたが、明治四十一年二十八歳で日本に渡来し、秋田市に居をおいて現在地に幼稚園を設立し、翌年同所に私立女子職業学校を設け校長となって女子の教育に当った。大正十二年私立聖霊女学院と改め院長となったが、昭和十六年病気のため名古屋に移って静養した。しかし、氏は第二の故郷たる秋田への郷愁たちがたく快復と共に再び来秋し、昭和二十九年私立聖霊短期大学を創立し以来今日まで聖霊学園の理事長として学園の運営に精励している。

この間実に五十年の長きに亘り故国を離れて県民の子女の教育に当たっていたのであるが、この国境を越えて捧げられた慈愛と信念は三千五百名に及ぶ同窓生に深い感銘を与え、又温厚敬虔な性格は広く慈母の如く県民に敬愛されている。

# 高山植物園の造成

千葉 忠一郎（75歳）

田沢湖町

千葉氏は、名勝駒ヶ岳の山麓に生を享け、幼少より駒ヶ岳の雄姿に親しんだが、その雄大明媚な自然の山容を広く江湖に推奨し、登山不能な人にも鑑賞の楽しみを分ちたいとの一念から、大正十二年家屋の周辺に小規模な高山植物園を造って公開した。これが好評を博したのでこれに励まされて更に拡張を図ったが、資金に追われて遂に自宅を売却し、その代金を以て漸く三百余坪の高山植物園と二丈余の駒ヶ岳の大模型を完成した。現在同園は県民は勿論県外者からも親しまれているが、氏の三十余年の努力による数百種の珍草木と数千個の岩石の収集は学術的にも研究資料として重要視されている。又氏は夙に天然記念植物の濫獲防止に努めると共にその育成栽培に専し、従来至難とされていた駒草の平坦地播種栽培に成功して高山植物の保存に大なる貢献をしている。

その他駒ヶ岳登山道路の改修に率先奉仕し、特に六合目白滝より頂上に至る悪路を自費を投じて改修し登山を容易ならしめる等観光事業にも多大の貢献をして来たが、今なお、ひたすらに山を愛し自然を愛して余生を駒ヶ岳に捧げている。

# 訳万葉の大成

村木 清一郎（69歳）

大館市

村木氏は、大館中学在学中、万葉集に興味を持ち、当時出版された「類題万葉短歌全集」を基礎に「万葉集略解」と照合しながら読んだが「全集」が類題形式による編集であるため、それぞれの歌が「略解」のどこにあるかを照合するのに非常に苦勞をした。しかし中学を卒業するまで十七巻を読破し、その後早稲田大学に入学し、図書館で「略解」を読了した。氏は大学在学中に「柿本人麿鑑賞」の執筆を思い立ち、友人と協力して研究に当たったが、その友人の支障のため中止せざるを得なかった。

その後大正七年母校の大館中学に奉職するに及び再び万葉集の研究に着手し「鑑賞万葉集」の企画にかかったが、研究途上索引の必要を痛感し自ら索引の作成にかかった。しかし、あまりにも内容が龐大なため「鑑賞」の筆が意の如く進まなかった。そのうちに各方面から「万葉集総索引」「万葉集の新研究」等が発行され更に大正十四年には氏の研究している「訓読集録」と同形式の「万葉集の鑑賞とその批評」が出版されるに及び氏は非常に落胆して一時は万葉集の研究を放棄しようと考えたのであったが、その後更に一念発起して全力を翻訳に傾注し研究を続けた。「万葉集」についてはその後も多くの著書が出版されたがいずれも氏の研究による内容、形式と比肩し得るものはなかった。氏の研究は実に三十年の歳月を要して昭和十六年漸く実を結び「訳万葉」の出版にとりかかったが、当時は戦時中のこととて使用紙量が龐大であるため実現されなかった。

しかし昭和二十八年に至り、大館市から出版費として十萬円の補助を受けたのでこれを基金として最近大日本印刷出版部から六百頁の「訳万葉」が刊行され氏の宿願が果たされたのである。氏は生涯の大半を「万葉集」の研究に尽し、強固な意志と忍耐力によりあらゆる障害を排除して遂に大業を為し遂げたのである。

## 県美術運動の推進

佐々木 素雲（64歳）

秋田市

佐々木氏は、明治四十四年二十歳のとき上京して当時木彫界の雄といわれた米原雲海氏に師事し、本格的な彫塑の指導を受けた。

大正十五年仏典からヒントを得て等身大の「安痒」を製作し帝展に出品して初入選し、その後出品毎に入選を重ねている。その後更に研究のため昭和二年国立美術学校彫塑部に入学し一層の研鑽を積んだが、特に氏の宗教的な香の高い独特の作品は特異な作風と共に斯界で高く評価されている。

昭和二十年戦災のため帰郷し、以来本県の文化活動の賑わざるを嘆いてその水準向上を図るべく、氏が主唱して県内の美術家諸氏と共に秋田総合美術連盟をつくり、昭和二十三年第一回美術展を開き以来毎年盛会裡に開催されている。又一方、氏は昭和二十四年県文化財専門委員に推されて彫刻工芸部門を担当しているが、天徳寺十六羅漢を初め県内の埋もれておった多くの文化財が氏の慧眼により発見されて曙光を浴びている。このように氏は独り偉れた彫刻家として斯界に活躍しているのみならず、困難な地方美術運動の衝に当り、本県の文化水準の向上に多大の貢献をしている。氏の敬虔な人格と円熟した作風から創作される作品は、各方面から大いに期待されている。

# 県体育界の育成

太田口 政治（57歳）

秋田市

太田口氏は、大正九年五城目小学校訓導として勤務して以来学校体育を通じて児童の体位向上を図るべくその方法として体操を取り上げてその研究実践に努めた。

大正十五年にはその体操に対する豊富な経験と実績を見込まれて能代中学に転任したが、その後ひたすらその情熱を体操に捧げ、生徒に対する指導も適切を極めた結果、後に能代中学から幾多の名選手を輩出した基礎を築いたのである。

又氏は夙に全県体操大会の必要性を痛感し熱心にその実行を説いて奔走したのであるが、遂に昭和十二年第一回秋田県体操大会を開催するに至り、その後戦争中の一時を除いて年年盛会を極めているのである。この大会を契機に本県の体操競技は飛躍的に発展し、毎年行われる明治神宮体育大会、全日本中等学校体操競技大会等では輝かしい優勝記録を続出して、今日の体操秋田の名を高める原動力となったのである。

戦後昭和二十一年に、氏は県体操協会会長に就任したが、体操器具や設備の不足に悩まされながらも熱心に県民の体位向上を図るとともに後輩の指導に当り、小野、鍋谷両選手初め次代を背負う幾多の俊英を育成したのである。

# 米の多収穫

丹 民 蔵 (54歳)

平鹿町

丹氏は、浅舞小学校を卒業後大正八年より現在まで農業に精励しているが、氏は農林省、朝日新聞社および秋田県共催による米の多収穫競作会には昭和二十四年から連続参加し、昭和二十七年には反当米収量五石四斗三升の多収を得、東北一収量賞を獲得し、昭和二十九年には六石五斗八升の反収を挙げ、東北一賞並びに技術日本一賞を獲得した。この間昭和二十八年には、非公式ながら五石九斗の反収を挙げて国内有数の篤農家として注目を浴びている。

氏がこれまでの多収穫を挙げるまでには勿論人一倍の努力を惜しまなかったことは当然であるが、その裏面には人知れぬ旺盛な研究心に燃えていたのである。即ち長年に亘る困難な土地改良、適品種の選定、優良苗の育成、施肥の改善、整地方法の改善、ずい虫の完全防除、密植法等々の研究を重ねて、漸く今日の高度な稲作技術を完成したのである。

氏の米作り一筋に生き抜いた不屈不撓の努力と研究心は、農民のみならず県民の範とすべきものであり、今後の活躍が一層期待されるのである。